



ハーレム
ジェネシス
Harem Genesis

立ち読み版

小説 竹内けん 挿絵 神保玉蘭

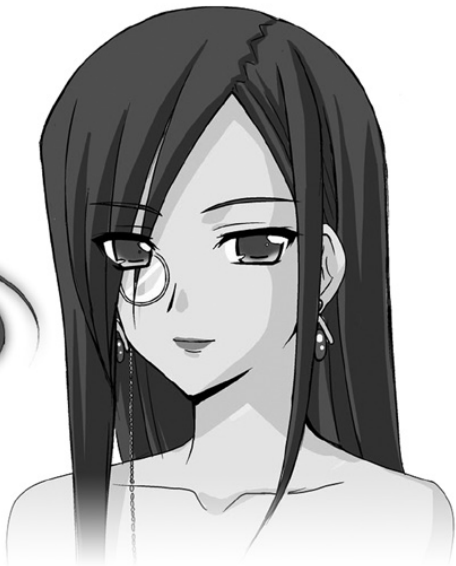
フランギース

アレックスの乳母。物事を完璧にこなす才媛。アレックスを目に入れても痛くないほどに猫可愛がりをしている。



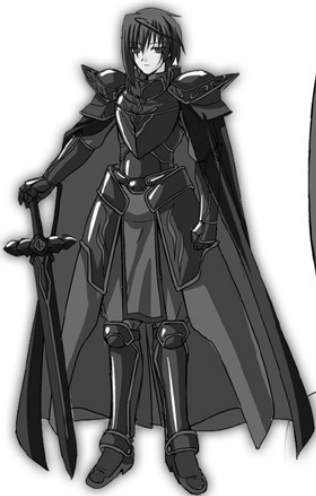
登場人物紹介

Characters



アレックス

ドモス王国の王太子。鷹揚な性格。父親ロレントの漁色家ぶりを見て育ったから、女性には誠実でありたいと考えている。



マンセル

黒く禍々しい鎧に身を包む騎士で、寡黙な美丈夫。女を避けるアレックスの側近としてやってきた。



ユーディ

ナウアシカ王国から訪れたお姫様。若く美しい外見の持ち主だが、世事にたけていて知恵が回る娘。

第一章	ドモスの王太子
第二章	仮面の魔法戦士
第三章	凄惨な一夜
第四章	白馬に乗った王子様
第五章	フレイア戦役
第六章	乳母の幸せ

アレックスはしぶしぶ着座する。それからユーディの顔を仰ぎ見る。「でも、なんで彼女なの？」

アレックスには身近にいくらでも綺麗な女性がいる。

それこそフランギースを始めとした女官や侍女や女騎士。最近の彼女たちはアレックスと寝台をともにしては、逸物を悪戯していくのが習慣のようになってしまっている。

その延長として、彼女たちに頼めば事足りることだ。他国から人質として来ているお姫様にお願ひするようなことではないだろう。

その疑問にフランギースは答えた。

「先日、アレックス様がコーディ姫に興味をお持ちになっておられていたようですので、お願いいたしました」

「え、いや、そんな……ちよつと、そんな言っていないよ。アレステリア姉様にちよつと似ているなって言っただけで……」

慌てるアレックスを、フランギースは宥める。

「まあ、よろしいではありませんか。すでに相手の了承はもらっているのです。ね、ユーディ姫」

「はい。アレックス殿下のお好みと聞いて嬉しいですわ」

雪国出身のお姫様は、春の日差しのようににっこりと笑う。実のところ、フランギースとしても頭を絞ったのだ。

本心を言えば自分でやりたい。フランギースは、生涯結婚せずに、王太子に全生涯を捧げると決めていた。処女のまま亡くなつて当然。アレックスの筆下ろしの相手として少しばかり夢を見てしまったが、王太子が嫌がるのなら、仕方がない。現実に立ち返つて、王太子の筆下ろしに相應しい女性を用意することこそ仕事であり、喜びだ。

しかし、女嫌いを公言するような主君の好みがわからない。アレックスのもつとも身近な女性といえば自分だが、拒否されてしまった。

ついでマチルダを思い浮かべたが、彼女は宿下がりをして弟と代わつてしまう。

また、容姿がいいだけの女になど、大切なアレックスを任せられない。そこそこの格式が欲しかった。

だからといって、経験豊富な貴婦人に任せると、今度はアレックスがその女の虜とりこになる可能性がある。フランギースとしては、アレックスが自分以外の年上の女に夢中になつてゐる姿を想像することは耐えられなかった。

そうやって消去法でいったとき、従属国とはいえ王族の出自。容姿は申し分ない。年齢的にもアレックスと釣りあう。何よりもアレックスが興味を示していたこのナウシアカ王国の姫君は、ちょうどいいと気付いたので。

そこで身辺調査をした結果、彼女が処女であることもわかった。これならば、アレックスが一方的に溺れる心配もあるまい。

こういった判断のもとで、フランギースは頼みに行つた。ナウシアカ王国としても、ド

モスの王太子と親密になるのは悪い話ではない。小国なりといえど王女である。上手くすれば正室の座も射止められるかもしれない。そんな思惑もあつてトントン拍子にまとまったのである。

「では、ユーディ様、お召物をお脱ぎください」

「はい」

フランギースに促されたユーディは、につこり笑つたまま、いそいそとピンク色のドレスを脱ぐ。

下には、ピンク色のビスチエに、ペチコートを身につけていた。

フランギースはスレンダー美人だったが、ユーディはグラマラス美人だ。その裸身はシュークリームののように柔らかかそうだった。

女性の裸体をまともに見られないアレックスは視線を泳がせながら質問する。

「あの……恥ずかしくはないんですか？」

ユーディはキョトンとした顔になった。それから、いかにも恥ずかしそうに両手で胸元を隠し、しなを作つてみせた。

「とつても恥ずかしくて顔から火が出そうですわ」

そのわざとらしい演技を見抜いたアレックスは、戸惑いながらも質問を返す。

「じよ、冗談ですよね……」

「ええ、冗談ですわよ」

ユーディは澄ました顔で応じる。そして、見せつけるように腕を上げてポーズを取ってみせる。ビスチェに包まれた巨大な乳房がぶるんと揺れた。

「だって、わたくし見られて恥ずかしい身体だとは思っておりませんもの。もちろん、見て損したとも言わせないうもりですわ」

「はあ……」

その自信はまったく正しい。若く柔らかい体躯。胸は大きいし、腹部はくびれている。それでいてお尻は大きい。顔も美人にありがちなきつきがなく、柔らかい顔立ちだ。

ドモス王国に比べれば、遥かに弱小とはいえ、ユーディとて生まれながらの王族である。日々多くの侍女に傅かたずかれて育ってきたのだろう。

裸ぐらい見られ慣れているはずである。

「下着も脱ぎましょうか？」

「はい。お願いします」

フランギースに事務的に促されたユーディはいそいそとビスチェを外した。

ぽよんつと巨大な肉塊が二つ姿を現す。

ほかほかの肉饅頭のようなおっぱいだ。淡いピンク色の乳輪も、まるでコスモスの花が咲いているかの如き可憐さだった。

ペチコートを外すと、ピンク色の生地白いレースの付いたスキャンティ。

その極小のショーツにも手を掛けて下ろしていく。右足、左足と交互に上げて、脱いだ

シヨーツをフランギースが受け取る。

結果、ユーディは一糸纏わぬ素っ裸になってしまった。

(す、凄い、全身がプロプロヨヨしていてまるで赤ん坊の肌のように柔らかそうだ)

アレックスの食い入るような視線を察したユーディは、さすがに少し恥ずかしくなってきたようだ。両腕で胸元と股間を隠して、横を向く。

おかげで剥きたてのゆで卵のようにツルツルとしたお尻が、アレックスの瞳に焼きついた。

「では、こちらに乗って殿下にすべてをお見せください」

「ふう、ちよつと熱いですわね」

フランギースに促されたユーディは羞恥に顔を真っ赤にし、肢体を震わせながら机の上に乗った。そして、後ろ手を付きながら、両足をM字に開脚させる。その足といわず肩といわず、全身がプルプルと震えていた。

「殿下、こちらに」

フランギースは、アレックスをユーディの正面に連れて来た。

「目を背けてはいけません。これはお勉強なのですよ」

フランギースにきつく言われたアレックスは、男としての好奇心もあって、恐る恐る女の陰部に視線を向ける。

両足の付け根には淡い金糸がうっすらと茂っていた。その下に切れ目がある。そこから

タラタラと透明な液体が垂れ流されている。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫ですわ。わたくし身体に自信がありますもの」

先ほどと違って、自分に言い聞かせているようだ。声が微妙に震えていた。

一方で、傍らに立ったフランギースはごく事務的に、女の生態を説明し始める。

「では、ご説明申し上げます。ここが乳房。このいただきが乳首。女の敏感な急所の一つです。セックスのときにはよく舐めしゃぶってください」

「そんな、赤ん坊じゃあるまいし……」

「殿下。乳首とは赤ん坊が愛でる前に、殿方が愛でるものなのですよ」

呆れ顔のアレックスを、片眼鏡のお姉様は優しく論ず。

「そして、弄っていると勃起してきます。勃起してからがより敏感になりますから、飽きずに責めるのです」

その後、鎖骨、脇腹、内腿なども女の性感帯であると教えたフランギースは、右手を伸ばすと、肉裂の左右に親指と人差し指を置き、ガバリと開いてしまった。

「っ!？」

さすがにユーディは目を剥く。驚いたアレックスが非難の声を上げた。

「ちよっとフランギース、そんなにやったらユーディ姫がかわいそうだよ」

「大丈夫です。女性器というのは、存外広がるものなのです。なんととっても赤ん坊が出

てくる場所ですからね。さあ、よく見てください。これが女性器です」

なんとなく見てはいけないものを見せられようとしていると察したアレックスは視線を逸らそうとするのだが、どうしても逸らすことができない。まるで磁力にでも引き寄せられるが如く見入ってしまった。

「うふふ、ピンク色の綺麗なオマ○コです。マンカスの欠片もない。殿下のために隅々まで洗ってきてくださったのですね。感謝いたします」

フランギースの声には微妙に女の嫉妬が混じっているようである。

「さて、殿下。ここがクリトリス。男性でいう男根ですね。しかし、尿道はこちらにあります。それから膣穴。わかりますね。お大事を入れる穴です。そして、こちらが肛門」

おとぎ話に出てくるようなふんわりと柔らかい雰囲気のお姫様に、こんな生々しい場所があったとはにわかに信じがたい。

茫然自失として魅入られているアレックスに、簡単な説明を終えたフランギースは質問してきた。

「殿下。ユーディ様の肌に触れたくはありませんか？」
ごくりっ。

思わず喉を鳴らしてしまったアレックスは改めて、羞恥に顔を真っ赤にし、今にも泣きそうになっているユーディの顔から、豊満な乳房、引き締まった腹部、そして、長い脚の間にある陰唇を舐めるように見ってしまった。

しかし、意地になって拒否する。

「べ、別に……触りたくないよ」

しかし、その反応はすでにフランギースの予測済みであった。

「そうおっしゃられると思ひまして、本日はこのようなものを用意いたしました。これでお触りください」

にっこり笑顔を浮かべたフランギースは、真新しい毛筆を差し出す。

「え……」

戸惑うアレックスの手に毛筆は無理やり握らされた。

「これでユーデイ様の肌に触れて、反応をお確かめください。直接触れるわけではありませんから、殿下の信念に背くことにはならないでしょう」

「で、でも……」

「さあ、指で触れるわけではありませんから」

乳母から押しつけられ思わず手にしてしまった筆と、全裸の美女を、アレックスは交互に見る。

そして、牡としての誘惑に少し負けてしまった。

「あ、あのユーデイ姫。こ、これで触れてもいい？」

「はい♪ 殿下のお好きないように……」

あらかじめ教えられていたのか、すでに覚悟はできているらしいユーデイは、ためらわ

ずに応じる。

そこでアレックスは、震える手で毛筆を差し出すと、恐る恐るユーデイの柔肌に近づける。そして、脇腹を一撫でした。

「あんっ」

ユーデイはなんとも艶めかしい声とともに身悶えた。それにアレックスは驚く。

「ごめん、痛かった」

「いえ、くすぐったかっただけです……」

か細く震えるユーデイの答えを、フランギースが補足する。

「柔らかい毛筆が触れたからといって痛いはずがありませんわ。どうぞお続けください」

「そ、そうだね」

筆先に触れてみると確かに柔らかい。それで安心したアレックスは筆を進めた。

サラリ、サラリ、サラリ、柔らかい毛先が女の脇腹から腹部、臍、内腿、鎖骨など様々な箇所を無心に撫で回した。

(軽くさらさらと触れているだけなのに、柔肌がプルプルと痙攣している。ムチムチして、全身がプリンでできているかのようだ。かぶりついたら、口内で甘く蕩けそうだ)

かぶりつきたいという男としての欲求と戦いながら、とにかく女性の反応が面白くて、手を止められない。

「あ、あん……、はあ、ああ……、ひいん♪」



筆で一撫でされるたびに、ぞくつと身悶えるようにユーディは震えた。その様がなんとも色っぽい。そして、撫でる場所ごとに少しずつ反応が違うことを察する。

やがてアレックスは、特別反応のいい場所を見つけた。

乳首だ。乳輪の周りに円を描くように撫で回すと、ユーディの喘ぎ声は一段と甲高くなり、乳頭がニョキニョキと飛び出してきた。

「うわ、乳首が充血して、凄い大きくなっちゃった……」

ピンピンに突起した乳首を目の当たりにして目を輝かせたアレックスは、ついでもう一方の乳首も弄び立たせる。

美少女の乳首を悪戯して楽しくない童貞少年がいるはずがない。アレックスは無心に両の勃起した乳首を弄り回していた。

すると不意に耳の後ろからフランギースの声がかかる。

「殿下、そろそろオマ○コも責めてあげてください」

「え、う、うん……」

アレックスはなんとなく陰唇だけは避けていたのだ。しかし、フランギースに促されたことで、戸惑いながらも筆を進めた。

ぴっちり閉じている肉裂の上から、さらさらと筆を走らせる。

「あぁ〜ん♪」

今までとはまた違った甲高い喘ぎ声に、アレックスは驚いた。

表面から撫でただけでこんなにいい反応をするということは、中身を撫でたらどういふ反応を見せてくれるのだろうか。しかし、女性には触れたくない。好奇心と道徳心で板挟みになった少年は、執拗に亀裂を撫で回しながら、ちらりと傍らのお姉様の顔を見た。

そこは生まれたときから一緒にいる、乳母と若様だ。以心伝心で通じた。フランギースはわざとらしくため息をつく。

「もう、女性に触れたくないというのも、不便ですわね。わたくしが協力しますわ」
フランギースは手を伸ばすと陰唇を開いてくれた。

ドロツ。

肉船の奥に溜まっていた粘液が垂れ、肛門にまで滴った。

(凄い。なんだこれ、さつきとまるで違う)

洪水のように濡れた女性器に、アレックスは恐る恐る筆先を浸した。

「あ、ああ……ちくちく、する……」

敏感な粘膜を撫でられてユーディは腰をプルプルと震わせる。筆がみるみるうちに水分を吸っていく。

丁寧な撫で回していると、不意に筆先が肉壺に触れた。

「あっ」

それまでじっと耐えていたユーディが、明らかに怯んだようにびくつと腰を引いた。しかし、好奇心に突き動かされたアレックスは、するすると筆を押し込もうとする。

第三章 凄惨な一夜

そんな年下の女たちの視線を無視して、フランギースは右手を伸ばし、雁の部分にかかっている包皮をズルリと完全に引きずり下ろす。そして、肉幹を愛しげに握りしめてから周囲を見た。

「どうかしら、殿下のお大事って、かわいい外見に反して、結構、凶悪でしょ。みなさん怖気づいたりしてないかしら？」

生々しい牡の生殖器を前に、処女娘たちは生唾を飲んで首を横に振るう。

「いえ、ぜひ殿下のお役に立ちたいですわ」

「こんな素晴らしいものを男などに奪われるわけにはいきませんわ」

積極的な女たちの返答にフランギースは満足する。

「その意気はよろしいですわ。ですが、いきなり挿入は無理ですわよ。まずは女体の素晴らしさを殿下にたっぷりとおアピールしてくださいませ」

フランギースの仕切りに従って、裸婦たちはアレックスの縛り上げられているベッドに乗ってきた。

「ひい……」

アレックスの喉の奥から引き攣った悲鳴が漏れた。

捕らえられた鼠が、大勢の猫によって罅り殺されようとしている。そんな凶が脳裏に浮かんだ。

「さあ、殿下に最高の初体験をしていただきましょう♪」

発情した牝獣たちは自らの裸身をアレックスに擦りつけてきた。

顔といわず、唇といわず、額といわず、首筋といわず、胸板といわず、内腿といわず、足の裏といわず、全身に隙間なくキスの雨を降らされる。

誰が誰のものかなどわからない。まるで女たちの唇で溶かされていくかのような感覚だ。ピチャピチャピチャピチャ……。ピチャ……。ピチャ……。

美女美少女の舌が、甘い砂糖菓子でも舐めるかのように少年の全身に這い回る。

「はあああああ!!!」

そのあまりのくすぐったさにアレックスは、わけのわからない悲鳴を上げてしまった。

そこにフランギースの嘲笑が聞こえてくる。

「うふふ、みなさん。存外遠慮深いですね。殿下のおちんちんにしゃぶりついてもよろしいですよ」

アレックスの裸体に密着していた女体が、ビクツと緊張に震えた。そして、一斉に逸物に顔を動かしたようだ。

チューツ!!!

いきなり逸物を先端から強く吸われた。しかし、すぐにすっぽ抜けて、新しい肉洞の中に吸い込まれる。

チュポチュポと強く吸われては別の口内へと移動する。

「ああ、これが殿下のおちんちんの味、美味しゅうございますわ」

「わたくしにも舐めさせてください」

逸物を巡って醜い争いをする乙女たちを、フランギースが止める。

「うふふ、まあ、淑女たるものが、そんなに涎を垂らして浅ましく奪いあうなんてみつともないですよ。仲よく分けあいなさい」

フランギースが仕切って、亀頭部を裏筋から舐める者、前から舐める者、右から舐める者、左から舐める者と、先端を舐める者、肉袋近くを舐める者たちと、前後左右上下から八枚の舌が、逸物に絡まり、順番に移動していく。

「あ、あああ……くうあ」

「どうです。殿下、あんな男に唾えられるよりも、よっぽど気持ちいいでしょう」

猫撫で声で語りかけてくるフランギースを、アレックスは慈悲を乞うような目で見上げて、ガクガクと頷くことしかできなかった。

やがて逸物を貪る女たちの尻が、クナクナと妖しく動きだし、よく見れば内腿が濡れ輝いている。

「あらあら、そろそろみなさん我慢できなくなってきたみたいですよわね。ですが、みなさん初体験なのですし、初挿入を前にもっとよく濡れておいたほうがいいですよ。そのためにも殿下にオマ○コをよく舐めていただきなさい」

「えっ」

戸惑う女たちにフランギースは、ごく当たり前に説明する。

「順番にアレックス様の顔に跨またがるのですわ」

さすがの痴女たちも、自分の陰唇を男の顔面に押しつけることには抵抗があるらしい。いったん逸物から顔を離れた女たちは、恥ずかしそうな表情で、モジモジと内腿を擦り

あわせるだけで、返事をしない。

（よかった。彼女たちにも良識があった）

アレックスは胸を撫で下ろしたが、安堵するには早すぎた。

「では、わたくしから参りますわ」

「ユ、ユーディ姫っ!!」

驚愕するアレックスに、ふんわり天然系の姫君はしなを作って応じる。

「だって、わたくしもう殿下にすべて見られてしまっていますし、恥ずかしいことなんて何もありませんわ」

同じ処女姫とはいえ、他の女たちとは違って、すでに先日、アレックスの前で大股開きになって、陰唇の隅々まで観察されてしまった身である。今さら男の顔面に座り込むことに精神的な抵抗が少なかったのだろう。

そのふんわりと柔らかい雰囲気のある美女は、アレックスの頬の左右に両足を置くと、まるで排泄するかのように腰を下ろしてきた。

「うっぷ!!」

アレックスの口と鼻が、女性器によって塞がれた。

「ああ、恥ずかしいですわ。殿方の顔にこんなふうに跨ってしまうなんて、国のお母様には知らせられませんか、ああ♪」

羞恥の悲鳴を上げながらも、ユーディは腰を前後に振るう。

愛液や陰毛が目や鼻に入ってきた。苦悶するアレックスに、フランギースが訴える。

「アレックス様、彼女たちはこれから殿下と結合するのです。よく濡れておかないと、お大事が傷ついてしまいますわ。後生だと思つてよく舐めて差し上げてください」

フランギースに説得されたアレックスは、恐る恐る口を開け、舌を出す。そして、ペロリと女性の粘膜を舐めた。

「ああ、気持ちいいですわあ♪ 恥ずかしいのに凄く気持ちいい。オマ○コから蕩けますわあ♪」

周囲の目を憚らず、ユーディは歓喜の嬌声を張り上げた。

一方、アレックスの口内にはしよっぱい味が広がる。

(ああ、これがオマ○コの味なんだ)

父親の真似はしたくないと思うアレックスだが、男である以上はやはり美女の陰唇には興味がある。

一度、舐めてしまうと、抵抗が薄れて、夢中になって貪ってしまった。

「ああ、ああ、ああ、舌、殿下の舌♪ そこグリグリされると気持ちよすぎて、わけが分からなくなりますわああ♪」

恍惚の表情を浮かべるユーデイの痴態に、周囲の女たちは魅せられ、生唾を飲む。それはフランギースとて例外ではない。

みなが羨ましそうに見つめる中、ユーデイの嬌声はどんどん甲高くなっていく。

「ひい、殿下、お上手、イク、わたし、イク、イってしまいます、ああああ!!!」
ビクビクビクビク!

ユーデイの肢体が激しく痙攣したかと思うと、その蜜壺から熱い液体がブシャツと溢れた。

「はあ、はあ、はあ……」

ぐったりと脱力するユーデイを、周囲の女たちはどけた。

そして、我先とアレックスの顔面に跨ってきたのである。

いずれも国を代表するような絶世の美女。フランギース曰く処女であること確認済みの乙女たちが、遠慮会釈なくアレックスの眼前で股を開き、座り込む。

「わたしのオマ○コも舐めてくださいませ! いっぱい、いっぱい、舐めてくださいませ」
「あん♪ わたしだって舐めて欲しいよお♪ 王子様の舌でペロペロって♪」

おそらく彼女たち一人一人であったなら、決して自分から男の顔面に跨るようなはしたない真似はできなかったであろう。しかしながら、集団心理の恐ろしさだ。

周囲の女たちが舐めてもらっているのに、負けていられるか、という対抗意識からどんな過激な行動になっていく。ゴリゴリと容赦なく男の顔面に陰部を擦りつけてくる。

一人二人ならともかく、連続八人もの女の陰唇を舐めるのだ。疲労した舌は満足に動かせなくなり、物足りない女たちは、容赦なく腰を振るった。

おかげでアレックスの顔は、愛液でベタベタになってしまふ。

「まあ、アレックス様ったら、凄いい顔ですわね」

全員が顔面騎乗で満足したところでフランギースは、濡れたオルでアレックスの顔を拭いながら新たな展開を示唆した。

「では、そろそろ本番といきましようか？」

誰が一番槍を取るか、と姫君たちの無言の牽制が行われる。

そんな中聖女ベロニカがしつとりとした口調で口を開いた。

「ここはやつぱり、乳母であられるフランギース殿に頂戴していただくというのが筋というものではありませんか？」

その提案は、予想外だったのだろう。フランギースは動揺した声を出す。

「な、何を言っているの!? わたくしと殿下では年が離れていて釣りあわないわ。それに殿下はわたくしのこと嫌っています」

必死に固辞するフランギースに、女騎士エクレールが口を開いた。

「今さら何を気取っているんだい。俺たちの誰かが最初になっても角がたつ。ここは若君の童貞を味わえるのは乳母の役得ということで、フランギース様が一番槍を取ったほうがいい」

「難儀な方ですわね。自分が殿下の童貞を頂戴したくて仕方がなくせに。スカートが乱れていますわよ」

ユーディの指摘にフランギースは顔を真っ赤にする。愛しい主君の顔面が凌辱されている光景を見ながら、こっそりオナニーしていた、ということを暗に指摘されたのだ。

しかし、自分の集めた美女美少女たちに口々に説得されて、その気になってしまった。

「そ、そうですね。乳母は嫌われて当然。いかに嫌われても殿下の初めてを頂くのは乳母たるわたくしのお役目。で、では、失礼して。殿下の初穂はわたくしが頂かせていただきます」

みなに推挙されたフランギースは、その場でスカートの中に両手を入れると、ショーツを脱いだ。

そして、いそいそとベッドに上がると、アレックスの股間に跨る。そして、緑地に金泥の入った厚手のスカートをからげた。

フランギースは他の女のように顔面騎乗をしたわけではない。

しかし、そんなことは不要であることは誰の目にも明らかだった。まるでお漏らししたかのようにだだ濡れになっている。

だが、そんな羞恥を上回る欲望に突き動かされた女は大胆なガニ股開きになると、いきり立つ逸物を自らの陰唇にあてがった。

「はあ、はあ、はあ……では、僭越ですが、ング、不肖このフランギースがアレックス様

の童貞を頂戴いたします」

アレックスの童貞を食いたくて仕方がなかった女である。それを一時は諦めたというのに、この土壇場で食えることになったのだ。

フランギースは傍目にも異様なほどに興奮していた。目は血走っているし、生唾を幾度も飲む。

「フランギース、やめてっ！　ど、どうしてそんなにセックスしたいの？」

「それは女たるもの、アレックス様のお情けを賜ることは、宝石の山を賜るよりも嬉しゅうございますれば当然です」

興奮のあまり泣きそうになっているフランギースとは逆に、アレックスもまた涙ながらに首を横に振るった。

「ぼくセックスしたくない。父さんみたいな真似したくないんだ」

「殿下の御心はよくわかりました。しかし、真の忠臣たるものには、主君が嫌がることでも身を賭してやらねばならぬことがございます。どうか、わたくしの操みさおをお受け取りください」

泣き叫ぶ若君の懇願を無視して、自称忠義の乳母は腰を下ろした。

ズブリッ！

龟头部が飲み込まれた。

「うぐっ」

二十七年間守ってきた貞操がついに破られたのだ。生肉を裂く痛みにはフランギースは悲鳴を上げそうになった。

いわゆる処女膜硬化が起きてしまっていたのかもしれない。高齢になるまで処女だと身体のほうがその機能は必要ないのだと思って退化する。そのため若いときの破瓜よりも痛くなるという話を聞いたことがあった。かなりとんでもなく痛い。

(うゝ、焦らずに彼女たちみたいに殿下にクンニしてもらえばよかった)
とフランギースは内心で思ったが、もはや後の祭りである。

年下の彼女たちの衆人環視の中、無様に悲鳴を上げるとは、知的で出来る女という自らのアイデンティティを否定することになるし、愛しい主君を無用に怖がらせることになる。「うぐぐぐぐぐ……」

必死に唇を閉じようとするが、口の端からうめき声と涎が漏れてしまう。

しかし、それでもとにかく強引に腰を下ろす。

まだ年若いアレックスの逸物は決して大きくはないはずである。大人の自分ならば無理なく飲み込めるはずだ。

しかし、大きくはなかったかもしれないが、とにかく硬い。

(ああ、小股裂けそう……)

ドスン!

M字に両膝を立て、結合部をまる晒しにしながら、フランギースはついに根元まで啜え

込むことに成功した。

脳天まで裂けるほどの痛みに襲われているフランギースだが、冷や汗を浮かべながらも、必死に笑顔を作る。

「殿下の初穂。乳母たるわたくしが頂きました。いかがですか、わたくしの、いえ、女の胎内に入った感想は？」

「フ、フランギース……」

信頼していた乳母に強引に童貞を喰われた若様は、ビクビクと肢体を痙攣させていた。

温かくもザラザラの大人の女の膣洞に、お子様のガンガンに硬い逸物がギュッと閉じ込められる。

その襲い来る肉体的な快楽に、アレックスは耐えられなかった。

「ああ……」

絶望の声とともに肢体を激しく痙攣させる。

「びくんびくん、びくんびくんしておりますわ、ああ」

愛しい主君の昂りにフランギースは歓喜の悲鳴を上げる。

睾丸から溢れ出した液体が、肉棒を通り、一気に噴き出す。

ドビュツッ！ ドビュツッ！ ドビュツッ！

「ひいひいひいひい!!! ビュービュー、ああ、ビュービューかかりますわ、熱い、熱い液体が
いっぱい、これ、これがアレックス様の、アレックス様のおおお!!!」



第六章 乳母の幸せ

その悪びれぬ返答を聞かされて、フランギースは頬を引き攣らせた。

「りよ、両刀というやつですか!? 男も女もお構いなし。……ある意味でロレント陛下よりタチが悪いかも……」

女のおささえ知れば、男など忘れると考えていたフランギースは、思惑が外れて愕然としている。

その姿を見て、アレックスは笑った。

「そっか、フランギースは本気で気付いてなかったんだよねえ」

「うふふ、ほんとフランギースさんって殿下のことが絡むと平静さを失いますわね」

ユーデイが追従し、他の女たちも「あはは♪」と楽しげに笑う。

みな笑い者にされてもフランギースは意味がわからない。

「なんのことです?」

キョトンとしている切れ者のお姉さんを、いつまでもそのままにしておくのはかわいそうだ。

アレックスはマンセルに命じた。

「マンセル、鎧を脱いであげてよ」

「承知しました」

マンセルは、黒地赤縁の鎧に手をかける。マントを脱ぎ、手甲を取り、胸鎧を外す。中から、サラシに巻かれた豊満な乳房が姿を現す。

「っ!？」

フランギースは目を剥いた。しかし、とっさに反応できなかったのだろう。硬直している。

その間に、マンセルは腰覆いを外し、脚甲を取り、ズボンを脱いだ。

中からは白いショーツに包まれた柔らかい腰が現れる。その股間の膨らみはすつきりしたものだ。

「……え？」

ようやく疑問の声を漏らしたフランギースを一瞥したマンセルは、胸元を覆うサラシも解いた。

ぷるんと弾力のある双乳がまろび出る。

「……なっ」

フランギースの顔が引き攣る。マンセルは黙々と白いショーツを脱いだ。中からは黒々とした陰毛に覆われた股間があらわとなる。

ここに至ってついにフランギースは絶叫した。

「な、なぜ、ええええええ!？」

目にしたものが信じられぬとばかりに四つん這いになってマンセルに近づいたフランギースは、その双乳を驚掴みにした。そして、モミモミと揉んでその弾力を確かめる。

しかし、それだけではまだ納得がいかなかったらしい。うつ伏せになってマンセルの股

間に顔を近づけると、黒い陰毛を掻き分けて、肉裂を割り、その中身を覗き込む。

「……おちんちんがない!? いや、これはおま〇こがある!? ど、どういうこと?」

自らが納得するまで確認したフランギースは茫然とした顔で、女の肉体を持った謎の男を見上げる。

同性とはいえ乳房を揉まれ、生殖器をまじまじと確認されたマンセルは、居心地が悪そうに仮面に包まれた顔を背ける。

そんなマンセルの困惑ぶりと、フランギースの仰天ぶりを周囲の女たちはクスクスと笑う。アレックスも笑いながら声をかけた。

「フランギース、まだ気付いていないの? マンセルはマチルダだったんだよ」

「えっ! マチルダ! マチルダああああ!?!」

常の自信たっぷりの振る舞いはどこへやら、頓狂の声を張り上げるフランギースの前で、素っ裸の黒騎士は、最後の仮面を外してみせた。

中からは男にしては美しすぎる素顔があらわになる。

「フランギース様、今までの欺瞞お許しください」

「ほ、ほんとにあなたマチルダだったの! どうしてこんな真似したの?」

激昂して食ってかかるフランギースに、マチルダは懺悔する。

「ルーシー將軍の指示です。アレックス様の周囲に男だけというのも不便だろうと……」

「ルーシー將軍が、くっ、そのような策ならばわたくしに一言あってもよさそうなもので

すのに……」

完全に騙されていたフランギースは、今までの心労を思い出して切齒扼腕する。

フランギースは真剣なのだろうが、アレックスや周りの女たちから見ると、悪戯を成功させたような気分であり、笑いが止まらない。

アレックスは笑いながら声をかけた。

「誤解も解けたことだし、仲直りのためにみんな楽しんで」

「は〜い♪」

他の女たちは一斉にドレスを脱ぎ捨てると、魅惑的な裸身を晒して、アレックスに抱きついてきた。それをアレックスは嬉々として受けとめる。

「フランギースが心配しなくても、ぼく女の子大好きだよ。あむ、おっぱい美味しい♪」

「あ〜ん♪ 殿下つたら♪ ス・ケ・ベ〜♪」

美女たちの大小様々な美乳を、手に取って乳首を舐めしやぶるアレックスの痴態をフランギースは啞然とした様子で見えていたが、やがて声を絞り出した。

「なるほど、そんなにおっぱい好きですか？」

「うん、好き。表面は冷たいのに、でも温かくて、それでいてプニプニしている。こんなに触り心地のいいものはないよ」

アレックスの正直な感想を受けて、いったん顔を伏せたフランギースだが、再び顔を上げたとき、その目の色はまったく変わっていた。

「そういうことでしたら、わたくしにお任せください」

それからはまさにフランギースの本領発揮といったところだった。活き活きと青い瞳を輝かせて、ビシバシと場を仕切る。

結果、仰向けになったアレックスの左右に、しなやかな猫のような小町娘のモニカと成熟した肉体の侍女メルビィを添い寝させた。アレックスの右手に神秘的な美貌の聖女ベロニカの乳房を握らせ、左手には褐色肌の女騎士エクレールの乳房を握らせる、左足の裏にはツンデレ美少女である公女ルシアナの乳房、右足の裏には九頭身美人の芸妓サファイアの乳房を踏ませ、顔面は知性派美人の次席女官グラヴィアの乳房が押しつけられた。

さらに逸物は乳母のフランギース、黒騎士マチルダ、隣国の姫君ユーディの乳房によって包まれるトリプルパイズリ。

「こ、これは……!?!」

身体中、どこを動かしても女たちの柔肉に包まれている。その信じがたい体験にアレックスは歓喜した。

「いかがでしょう。名付けておっぱいプレスっ!」

フランギースは自信満々に宣言する。

「凄い、凄すぎるよ。やっぱりフランギースがいると便利だよね♪」

子供のようにはいしゃいだアレックスは、嬉々として両手足や股間を動かし、至福の感触を楽しむ。

「まあ、アレックス様ったら♪ ありがとうございます。お役に立てて嬉しいですわ。さあ、みなさん、アレックス様を思いっきり楽しませて差し上げましょう。それが側女たる者の務めですわ」

フランギースの掛け声に、女たちは口々に応じる。

「承知しておりますわ」

「負けませんわよ」

楽しげに嬌声を張り上げた女たちは自慢の美体を、アレックスに押しつけ、擦りつける。
（ああ、どこもかしこもプルンプルンのおっぱいだらけ。ううう気持ちよすぎる。身体溶けそう♪）

いずれも極上の美女美少女ばかり、乳房も大小形の違いはあれど逸品であることは疑いない。そんな中でも逸物に集中した乳房たちは特に凄かった。

フランギースの熟れた乳房、ユーディのやわやわ乳房、マチルダの普段抑圧されていたがゆえに弾ける乳房。これで三方から包まれているのだ。

先ほどフランギースの体内に収まり、射精したばかりだから、愛液と精液に塗られてドロドロになっており、それが潤滑油になるらしく合計六房の乳房はよく滑った。

「あはっ、殿下のおちんちん、びっくんびっくんしておりますわね」

「女に目覚めたなら目覚めたで早くおっしゃってくださいればよろしかったのに……。アレックス様に最高の快楽を提供するためには、わたくし骨惜しみをいたしませんわ」

「くっ、しかし、こうやって乳首を擦りつけるというのは、結構効きます……」

ユーディ、フランギース、マチルダは競って乳房を逸物に押しつけるだけでなく、互いの乳首を亀頭部の裏側など、敏感なところに擦りつけてきた。

（気持ちいい。気持ちよすぎる。すぐに出そうだけど、すぐに出したらもったいなさすぎる。我慢しないと……）

およそ人の身で体験できる最高の悦楽に浸ったアレックスは、たった今射精したばかりだというのに、もう射精欲求に屈しようとしていた。

「うふふ、殿下ったら我慢することはありませんわ。わたくしたちは殿下の慰み者。殿下の出したいときにお出しになって♪」

ユーディが尿道口をペロンペロンと舐めてきた。それはさながら母猫が子猫のお尻を舐めて排泄を促しているかのようだ。

それに触発されたのだろう。フランギースとマチルダも亀頭部を舐め始めた。三枚の舌で、三方から尿道口を開かれる。

「う、うぐううう……」

アレックスは目の前の乳首を思いつきり吸い、両手足の乳房を握りしめ、足下の乳房を踏みしめ、必死に耐えた。

しかし、両脇から擦りつけられる乳房と、逸物に押しつけられた乳房たちは止めようがない。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評発売中

**少女天使の暴走が
平和な学園生活を破壊する!!**
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃」

思春期なアダム4 聖域の崩壊



「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃」

呪詛喰らい師2
[小説:蒼井村正 / 挿絵:或十せわか]

全国書店で
好評発売中

**凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に墮とす新たな敵の登場!**




全国書店で
好評発売中

**クトゥルフの娘たちが
学園祭でメイドさんに変身!?**
ルルらちに新たな邪神が這い寄る!

「小説…羽沢向 / 挿絵…ヒエール☆よしあ」

魔海少女ルルイエ・ルル2

既刊LINEUP

- 仙道学園戦姫 / プナガリ ①~③
- ビルグリムメイデン ①~③
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①~③
- 呪詛喰らい師 [カースイーター]
- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!